



大庄中は平成27年度に創立10周年、尼崎市は平成28年に市制100周年を迎えます

全国学力・学習状況調査結果 その1

尼崎市の学校別結果公表について

8月26日に、全国学力・学習状況調査(以下「全国学力調査」とします)の結果が発表されました。

また、お盆前には、「尼崎市が全国学力調査の学校別結果公表へ」という新聞記事が出ました。この新聞記事は、尼崎市が学校別の平均正答率の数値そのものを公表するかのような受け止め方をしてしまう見出しの書き方でしたが、そうではありません。尼崎市は、学校の序列化や過度の競争を避け、保護者と課題を共有するために、結果を分析し、改善策を示し、「学校別の平均正答率の分布をグラフで示す方法などを検討中…」という説明を新聞社にしたのに、違った受け止め方をされかねない見出しになっていたそうです。尼崎市の方針は、文部科学省の「全国学力調査実施要項」に示されている「単に平均正答数や平均正答率の数値のみの公表は行わず、結果について分析し、分析結果や今後の改善策も示すこと。調査結果は学力の特定の一部であること、学校教育活動の一側面であることなどを明示すること。」と同じです。尼崎市は、平均正答率の数値そのものを公表する予定はありませんので、誤解のないようお伝えしておきます。

ですから、本校の調査結果につきましても、平均正答率の数値だけをお知らせするのではなく、結果を分析した内容をお知らせし、これからの学習に役立たせたいと考えています。

平均正答率とは

まず、「平均正答率」について説明します。「平均正答率」というのは、100点満点で平均点が何点ということではありません。例えば、今年の中3の国語A(知識)は、32問の問題がありました。各生徒が、32問のうち何問を正解したかが「正答数」で、その「正答数」がその調査の問題数(国語Aでは32問)の何%になるかを示した数値が「正答率」です。そして、個人個人の「正答率」を都道府県別や全国で平均した数字が、新聞などで発表されている「平均正答率」です。

今回の国語A(問題数32問)を例にして説明してみます。生徒数5人のあるクラスで、正答数が、Aくん15問、Bくん20問、Cくん25問、Dさん30問、Eさん32問だったとしましょう。

このクラスの平均正答数は、

$$(15+20+25+30+32) \div 5$$

$$= 24.4$$

となり、このクラスの平均正答率は、

$$24.4 \div 32 = 76.3\%$$

という数値になります。



選択肢も文章記述も同じ一問

このように、平均正答率は、問題の数に対して何問正解したかを表すものですが、この調査の解答方法には、選択肢と記述式と両方あり、どちらも正解は一問としてカウントされます。つまり、「平均正答率」を算出する上では、選択肢も記述式も同じ一問の扱いになりますし、学校のテストのような「部分点」や△はありません。

今回、国語A(知識)では、選択肢が20問で、文章や漢字で答える問題が12問です。国語B(活用)では、選択肢が6問、3問が文章記述でした。しかも、この3問は、選択肢から1つを選び、50字くらいの文章記述もすべて正しくなければ○にならない問題です。数学A(知識)では選択肢が19問、図を書いたり計算の答えを書いたりことばで答えたりする問題が17問でした。数学B(活用)は、選択肢が3問、証明問題や説明を文章で書いたり数字で答えたりする問題が12問でした。

本校の平均正答率は全国平均より少し下

本校の「平均正答率」は、4つの調査とも全国平均より少し低い数値で、国語Aは全国平均の約9割、国語Bは4分の3程度、数学Aは約8割、数学Bは4分の3程度でした。昨年と比べると、国語Aは今年の方が少し上回っていました。数学AとBはほぼ同じでしたが、国語Bは、昨年よりかなり低い数字でした。この国語Bでは、正解0%の生徒が6人もいました。その中で、3人は国語Aの正答率が70~80%以上でしたので、国語Bが0%のはずがないと思い、本人達にも解答を書いたかどうか確認し、採点間違いや入力間違いがないか、「全国学力調査コールセンター」に問い合わせもしてみました。102万人の解答用紙から、本校の6人の解答用紙を見つけ出し確認してもらいましたが、「間違いはありません」という返事でした。ということは、やはり答えが間違えていたのか、問題の求めている答え方になっていなかった、ということなのでしょう。

国語Aは約6割の人が全国平均レベルなのに…

今回の調査で、大庄中全体の国語A(知識)の平均正答率は、全国平均の約92%でしたが、4つの調査をすべて受けた81人(修学旅行の翌週で3組は学級閉鎖中でした)のうち40人は、国語Aで全国平均正答率を上回っていました。また、あと1問正解したら全国平均を上回る人が7人、あと2問正解したら全国平均を上回る人が5人いましたから、国語Aについては、本校生徒の約6割がほぼ全国平均レベルということがいえるでしょう。国語A以外の全国平均を上回った人数は、国語Bが25人、数学Aが29人、数学Bは33人でした。

また、国語Aで、正答率が60%以上の人は67人いました。ということは、大半の人は国語についての基礎的な知識を持っているはずなのに、その中には、国語Bや数学で全国平均に届いていない人が、かなりの人数いるということです。これは、本来ならできるようになっているはずの活用問題や数学について、これまでの学習で身につけていないということでしょう。もったいないことです。

大庄中には3つの調査で全国1番の人がいました

大庄中には、国語B、数学A、数学Bの3つの調査とも正答率100%というすごい生徒がいました。全問正解ですから、3つの調査ともに「全国1番」です。全国で102万人近くが受けている調査の1番です。さらに、この生徒は、国語Aも32問中31問の正解でしたから、4つの調査の全92問で、間違えたのはたったの1問だけという、とても素晴らしい結果でした。この生徒は、塾には行っていないし、部活動も熱心にやっています。メールやテレビゲームやビデオなどに費やしている時間も少なく、宿題や予習・復習など、平日と休日の家庭学習も計画的に行っています。学校の学習をきちんとやっていたら、この調査で良い成績がとれるという見本だと思います。

(文責:校長 福井 隆夫)